

1 事業名 SANBEスマイルキャンプ

2 必要性

不登校問題に関する調査研究協力者会議（平成14年9月文部科学省設置）による「今後の不登校への対応の在り方について（報告）」（平成15年3月）では「適応指導教室と体験活動プログラム等を実施する社会教育施設との積極的な連携が望まれる」と提言されている。

平成21年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（平成22年8月5日付文部科学省）の調査結果によれば、小・中学校における不登校児童生徒数は日本全国で約12万2千人と前年の平成20年度（約12万7千人）より約4千5百人減少（約3.4%減）し、在籍児童生徒数に占める不登校児童生徒の割合も1.15%と、前年比（1.18%）より0.03ポイント減少したとある。しかし、依然として日本全国の不登校児童生徒数は12万人を超えており、対策を講じる必要がある。

上記調査によると、当施設のある島根県の平成21年度速報値では、不登校児童数197人、不登校生徒数571人、合計768人と発表された。平成20年度と比較すると、全体的には減少傾向にある中で、小学校では15人増加している。（平成20年度は、小学校182人、中学校638人、合計820人）

青少年教育施設である当施設が適応指導教室及び島根大学教育学部附属教育支援センターとの連携の核として平成15年度から実施している本事業は、平成22年度で8年目を迎えた。この間、島根県のほぼ中央部に位置している当施設を活動の拠点として、東西約50kmの広域の地域から複数の適応指導教室が年に2回集まり実施する運営体制（平成20年度より）は、段階的に改良され現在のスタイルへと定着してきた。

このSANBEスマイルキャンプは、児童生徒が家庭や適応指導教室などの固定化された人間関係から離れて、他教室の児童生徒や指導者、学生支援ボランティア等たくさんの人と触れ合い人間関係を広げる場として、三瓶の大自然の中で体験活動を通して自己を開放できる場として、基本的な生活習慣の確立のためのきっかけづくりの場としてなど、不登校状況改善にとって必要かつ重要な取組となっている。そして、この事業を運営していくためには、複数の適応指導教室や関係機関との連携・協力の核として国立青少年教育施設の果たす役割は大きい。

3 趣旨

島根県内（大田市・出雲市・江津市）の適応指導教室及び島根大学教育学部附属教育支援センターと連携し、国立三瓶青少年交流の家周辺の豊かな自然環境の中で宿泊型体験活動プログラムを実施することによって、不登校児童生徒の相互交流を深め状況改善への機会とする。また、適応指導教室の指導者や学生支援ボランティアを対象とした研修会を開催することにより、不登校児童生徒への理解を深め指導技術の向上を図る機会を提供する。



（雪化粧の男三瓶山）

～三瓶青少年交流の家つどいの広場から～

4 期日

（1）第1回SANBEスマイルキャンプ

平成22年9月10日（金）～9月11日（土） 【1泊2日】

※学生支援ボランティアは、前日の9月9日（木）より事前準備等のため参加 【2泊3日】

(2) SANBEスマイルキャンプ研修会

平成22年11月24日(水) 【1日】

(3) 第2回SANBEスマイルキャンプ

平成23年1月14日(金)～1月15日(土) 【1泊2日】

※学生支援ボランティアは、前日の1月13日(木)より事前準備等のため参加 【2泊3日】

5 参加者

(1) 第1回SANBEスマイルキャンプ

児童生徒26名(5教室等:小学生4名・中学生22名)、指導者19名(5教室等) 計45名

※学生支援ボランティア15名

【第1回SANBEスマイルキャンプ児童生徒数の内訳】

教室等	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	合計	男女合計
あおぞら学園	—	—	(1)	—	1	1 (1)	2
あすなろ教室	1	—	(2)	—	2 (1)	3 (3)	6
すずらん教室	(1)	(1)	1	1	3 (1)	5 (3)	8
光人塾	—	—	—	(3)	1 (4)	1 (7)	8
トライアングル	—	(1)	—	—	(1)	(2)	2
合計	1 (1)	(2)	1 (3)	1 (3)	7 (7)	10 (16)	26
男女合計	2	2	4	4	14	26	

※()内の数字は、女子児童生徒数、数字は、男子児童生徒数を表している。

(2) SANBEスマイルキャンプ研修会

適応指導教室指導者及び関係機関参加者23名

(3) 第2回SANBEスマイルキャンプ

児童生徒35名(4教室:小学生5名・中学生30名)、指導者15名(5教室等) 計50名

※学生支援ボランティア等15名

【第2回SANBEスマイルキャンプ児童生徒数の内訳】

教室等	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	合計	男女合計
あおぞら学園	—	—	(1)	1 (1)	2	3 (2)	5
あすなろ教室	—	—	(4)	(1)	2 (1)	2 (6)	8
すずらん教室	(1)	(1)	1	(1)	3	4 (3)	7
光人塾	2* (1)	—	1	1 (3)	1 (6)	5 (10)	15
トライアングル	—	—	—	—	—	—	—
合計	2 (2)	(1)	2 (5)	2 (6)	8 (7)	14 (21)	35
男女合計	4	1	7	8	15	35	

※()内の数字は、女子児童生徒数、数字は、男子児童生徒数を表している。

*光人塾の小学5年生男子児童2名と記載しているうちの1名は、小学2年生男子である。

6 参加経費

- (1) 第1回SANBEスマイルキャンプ
小学生 2,310円、中学生・指導者 2,350円
- (2) 第2回SANBEスマイルキャンプ
小学生 2,300円、中学生・指導者 2,350円



(不登校児童生徒に関する講演会)

7 講師

【SANBEスマイルキャンプ研修会】

筑波大学人間総合科学研究科 准教授 坂本昭裕 氏

8 事業の内容

<平成15年度から8年間の事業経過>

【H15年度からH22年度までの参加適応指導教室数及び児童生徒数】

年度 教室等	H15 (7,10月)		H16 (7,9,1月)			H17 (7,9,1月)		H18 (7,9,1月)			H19 (7,9,1月)			H20 (9,1月)		H21 (9,1月)		H22 (9,1月)		
	あおぞら学園 (江津市)	→																		
あすなる教室 (大田市)	→																			
すずらん教室 (出雲市)	→																			
光人塾 (出雲市)	→																			
トライアングル (出雲市)	→																			
(参加数)	(3)						(4)										(5)			
児童生徒数	15	19	15	18	16	28	34	33	31	30	17	36	20	43	35	37	40	47	26	35
当施設の関わり	主催事業 ※実行委員会の立ち上げ (H16年度)								研修支援関連事業 ※現在の運営体制が確立 (H20年度)										委託事業	

※あすなる教室 (安来市) H17.9月 (5名)、H18.9月 (2名) 参加

(1) 事業の特色

本事業は、平成15年度に「青年の家での規律ある生活や創作活動、野外活動などのグループワークを通じて、適応指導教室に通う児童・生徒に豊かな生活体験を味わわせ、自主・自立の心を育むステップとする。」という趣旨のもとに始まり、平成17年度までの3年間は当施設の主催事業として実施した。さらに、平成18年度から平成21年度までの4年間は、当施設の研修支援関連事業として実施してきた。この事業は、各適応指導教室の年間計画にも位置付けられ、協議をして運営スタイルや内容等を改善しながら7年間継続実施されている。(研修支援関連事業とは、

利用団体が主体的に事業の企画立案から運営までを行い、当施設は、よりよい成果が上がるように支援をしていく事業のことをいう。）

平成 22 年度は、文部科学省委託事業「青少年体験活動総合プラン（子ども・若者育成支援のための体験活動推進事業）」、国立青少年教育振興機構活性化プラン対応事業（課題を抱える子どもを対象とした事業）として実施した。平成 15 年度より、当施設周辺の豊かな自然環境の中で宿泊型体験活動プログラムを提供してきた。過去 7 年間の適応指導教室との段階的な関わりや取組等を報告書にまとめ整理することにより、望ましいスマイルキャンプの在り方を考えることとした。

（2）企画のポイント

平成 20 年度から、年に 2 回（9 月・1 月）実施する現在の運営体制が確立された。平成 21 年度まで 7 年間継続して実施してきた事業なので、適応指導教室間の連携・協力体制や事業運営体制等は段階的に確立している。

そのため、平成 22 年度もこれまで定着している運営体制等を変えずに企画することとした。当施設の役割としては、主管教室担当者が企画立案をするときの活動プログラムを含めた全体的な相談、プログラム指導、ボランティア指導等とした。また、不登校児童生徒や発達障害についての研修会を開催し、適応指導教室指導者や学生支援ボランティアの不登校児童生徒に対する理解を深める機会や指導技術の向上を図る機会を提供した。更に、複数の適応指導教室が連携して実施している取組を報告書概要版として作成し、中国四国地方の適応指導教室や全国の関係機関に情報発信することにした。

【各団体の役割分担表】

<第 2 回スマイルキャンプ>

団体(担当)	役 割		
	事前準備	キャンプ当日	事後処理
主管教室 (あすなる教室)	<ul style="list-style-type: none"> ・名簿、詳細日程、しおりの作成及び配布 ・アンケートの作成及び印刷 	<ul style="list-style-type: none"> ・開講式、情報交換会、反省会、閉講式の開催 ・各プログラムの司会進行 ・アンケートの配布及び回収 	<ul style="list-style-type: none"> ・次回主管教室への引継ぎ ・参加アンケート集計及び結果連絡
個別風呂担当教室	<ul style="list-style-type: none"> ・個別風呂（必要な児童生徒）に関する情報収集 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別に風呂割当て（必要な児童生徒がいる場合） ・反省会準備 	
ボランティア担当教室 (すずらん教室)	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア募集 ・ボランティアと主管教室への連絡及び関係書類等の送付 ・ボランティア事前指導の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援ボランティアの支援（特に S A N ボラタイム） 	
各適応指導教室 (共通)	<ul style="list-style-type: none"> ・名札作成 ・詳細日程及びしおりの印刷 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援ボランティアの支援（特に配慮を要する児童生徒がいる場合） ・会計（支払い） 	<ul style="list-style-type: none"> ・教室でのふりかえり及びまとめ（児童生徒） ・教室内での反省会
学生支援ボランティア	<ul style="list-style-type: none"> ・前回ボランティアからの引継ぎ ・事前学習への参加 ・S A N ボラタイムの準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の交流や活動の支援 ・S A N ボラタイムの実施 ・オリエンテーション会場の設営 ・名札ケース及びシート等活動必需品の配布 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の反省（ボランティア引継ぎノート）

国立三瓶青少年 交流の家	<ul style="list-style-type: none"> ・詳細日程の打合せ ・ボランティアの指導及び服装準備 ・会計（経費一覧表の作成） ・垂れ幕等の作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラム指導 ・ふりかえり映像の作成（活動スナップ写真） ・参加者やボランティアのバス送迎 ・利用アンケート関係 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業全体のまとめ ・利用アンケート集計
-----------------	--	---	---

(3) 広報のポイント

児童生徒の参加については、適応指導教室が募集をした。また、平成21年度に参加した4適応指導教室を通じて、島根県内の他の適応指導教室にも事業への参加を呼びかけた。

(4) 日程表

※学生支援ボランティア：レクリエーションやプレゼント準備等のため、キャンプ前日より入所（第1回、第2回）

【第1回SANBEスマイルキャンプ】

9	10:30	10:40	12:00	13:00	13:55	14:20	17:10	17:30	19:00	21:30	22:00
月 10 日	受 付	出 会 い の 集 い *①	昼 食	SANボ ラ タ イ ム *②	情 報 交 換 会	ス ナ ッ グ ゴ ル フ *③	つ ど い	夕 食	フ リ ー タ イ ム *④	入 浴	就 寝

9	6:30	7:00	7:20	7:40	9:00	13:15	14:30
月 11 日	起 床	つ ど い	清 掃	朝 食	ダ ッ チ オ ー プ ン *⑤	ふ り か え り ま と め	退 所



(香ばしいにおいのローストチキン)

*① 出会いの集い：あいさつ、日程説明、オリエンテーション等を行った。（第1回、第2回）

*② SANボラタイム：学生支援ボランティアが企画・実施するレクリエーションで、スマイルキャンプ全体において、アイスブレイク的な位置付けにしている。（第1回、第2回）

*③ スナッグゴルフ：心身ともに思いきり開放して自然を満喫することができるように、三瓶山北の原（景観的に雄大さを感じられる）を活動場所を選んだ。支援ボランティアを各グループごとに2名～3名配置し、声かけや技能面のアドバイスをした。

*④ フリータイム（ゆとりの時間）：児童生徒の自由時間（ゲーム、スポーツ、フリートーク、入浴等）とした。

*⑤ ダッチオープン（ピザ・ローストチキン・ミネストローネ）：包丁の使用や火のおこし方等の安全面に関する指導は、当施設職員が行った。活動中にグループで起きた問題は、自力解決していく経験をさせることを共通理解して実施した。

【SANBEスマイルキャンプ研修会】

11	10:00	12:00	13:00	15:00
月 24 日	○第1回スマイルキャンプ（9月）のふりかえり及び第2回スマイルキャンプ（1月）のプログラム検討会（講義）		休 憩	○講演会 演題：「不登校児童生徒の自然体験活動～旅キャンプ Road to Self つくばから富士山への取り組みから～」

【第2回SANBEスマイルキャンプ】

1	10:30	10:40	12:00	12:50	13:40	14:20	17:10	17:30	19:00	21:30	22:00
月 14 日	受 付	出 会 い の 集 い	昼 食	S A N ボ ラ タ イ ム	情 報 交 換 会	雪 合 戦 *⑥	つ ど い	夕 食	フ リ ー タ イ ム	入 浴	就 寝

1	6:30	7:00	7:20	7:40	9:00	12:00	13:15	14:30
月 15 日	起 床	つ ど い	清 掃	朝 食	カ プ ラ (西 洋 積 み 木) *⑦	昼 食	ふ り か え り ま と め	退 所



(盛り上がった雪合戦)

*⑥ 雪合戦：冬の三瓶でしか体験できない、雪を使った活動を設定した。(雪遊び、そり遊び)

*⑦ カプラ：全員で一つのものを完成させる共同体験や喜びを味わわせるため、人間関係づくりにも効果的であるといわれているカプラを導入した。

(5) 運営のポイント

- ・平成21年度に引き続き、他教室の児童生徒と交流が深められるように計画立案することを確認した。
- ・基本的な生活習慣（起床就寝時刻を守る、挨拶をする、掃除をする、時間を守るなど）を意識するよう、集合したときに児童生徒に促した。
- ・活動プログラムへの参加にあたっては、児童生徒の実態を踏まえつつ心身への負荷の限度までは、励ましの声かけによって自発的な参加を促していくことを指導者側の共通認識とした。
- ・活動中における指示や説明等は、簡潔な言葉ではっきり伝えるようにした。
- ・個別に使用できる風呂を確保した。(配慮を要する児童生徒のため)
- ・ふりかえりやまとめでは、活動スナップ写真をスライド形式に映写した。(児童生徒が活動全体の様子を時系列に想起する一助とするため)
- ・当施設のマイクロバスを活用して大学まで送迎した。(学生が支援ボランティアとして参加しやすい環境を整備するため)
- ・支援ボランティアの宿泊場所は、別棟であるセミナーハウスをあてた。(準備等の活動がしやすいようにするため)

(6) 安全管理のポイント

- ・特に配慮を要する児童生徒もいるため、情報交換会の時間をSANボラタイム後と就寝前に設定した。(配慮事項や接し方等に関する情報を関係者全員が共有し共通理解することによって、児童生徒の心の安全を図るため)
- ・支援ボランティアに対して、不登校や発達障害についての基礎的な知識や対応等について学習の機会を提供した。
- ・適応指導教室の指導者や学生支援ボランティアを対象にして、不登校や発達障害に関する研修



(児童生徒の心の安全を図るための情報交換会)

会を実施した。



(7) 参加者・スタッフのこえ

<児童生徒>

(学生支援ボランティアからの心温まるプレゼント)

- ・初めての参加で不安もあったけど、楽しく過ごすことができた。スナッグゴルフやダッチオープンなど、ボランティアの方が丁寧に教えてくれたので、安心できた。
- ・自分たちが住んでいる所では、体験できないことができた。みんなで雪遊びができて、うれしかった。
- ・初対面の人とも話ができた。
- ・みなさん話しかけてくださって、とってもうれしかった。
- ・朝起きる時間が早かったので、ちょっときつかった。

<適応指導教室指導者>

- ・つどい有的时候に、人前で堂々とスピーチをすることができた。そのことが、自信につながった生徒がいる。
- ・スマイルキャンプ後、自信をつけて学校に再登校することができた児童がいる。
- ・平成23年度のスマイルキャンプを楽しみにしている。何事にも、意欲的に興味がでてきている。
- ・スマイルキャンプがきっかけとなり、週3日朝から登校できるようになった。

<支援ボランティア>

- ・将来、支援を必要としている子どもたちに関わる仕事に就きたいという想いがさらに強くなった。
- ・スマイルキャンプのことは知っていたが、実際にどのような活動をしているのかを見て指導方法を学びたいから参加した。
- ・学ぶことがたくさんあるし、児童生徒とふれあえるので楽しい。
- ・9月(1回目)のときに、1月(2回目)にまた来ると生徒と約束し、再会を楽しみに参加した。



(支援ボランティアの最終打合せ)

～スマイルキャンプ前日～

<国立三瓶青少年交流の家職員>

- ・活動を行う中で徐々に自信もつき、自分から進んで取り組む姿が見られうれしく思った。
- ・特定の人としか関わろうとしなかった生徒が支援ボランティアや他教室の生徒と交流を深める姿が印象的だった。
- ・硬かった表情がだんだんとほぐれ「スマイル」が見られるようになったことがうれしい。

9 成果と今後の課題

<成果>

○参加機関の増加

平成22年度は、新たに出雲市の不登校対策指導員が関わる在宅児童生徒の参加があった結果、5つの適応指導教室等で実施した。(第1回目は、児童生徒が2名・指導者が3名参加した。第2回目は、児童生徒は不参加だったが、指導者が1名参加した。)このことは、これまでの取組やスマイルキャンプの必要かつ重要性が他の機関にも認められたことの表れといえる。

○他機関とのつながり

不登校児童生徒に関する研修会では、5つの適応指導教室等以外から6名の参加があった。（広島県安芸高田市の適応指導教室から3名、出雲子ども支援センターから1名、出雲養護学校大田分教室から1名、大田市内のNPO法人から1名）島根県外や適応指導教室以外からの参加があったことは、スマイルキャンプの取組が認知され広がりを見せているといえる。研修会後には「複数の適応指導教室が集まって、実施しているのはすばらしい。SANBEスマイルキャンプをモデルとして、自分たちの地域でも行ってみたい。」という感想をいただき普及への可能性が得られた。

○支援ボランティア

年2回実施したスマイルキャンプには、実人数で23名の支援ボランティアの参加があった。しかも、平成22年度は、島根大学教育学部以外から新たな参加を得て輪を広げることができた。スマイルキャンプへの参加が若者の社会参画に向けて有効な学習の場であると共に、不登校という状況を改善するのに有用な援助者であることを確認できたことも成果といえる。

【ボランティアの所属及び人数】

	1回	2回	計
島根大教育学部	14	12(7)	26(7)
島根大医学部	—	2	2
島根県立短大	1	—	1
大田分教室	—	1	1
計	15	15(7)	30(7)

※（ ）内の数字は、2回連続参加者

○SANBEスマイルキャンプのねらい及びプログラム

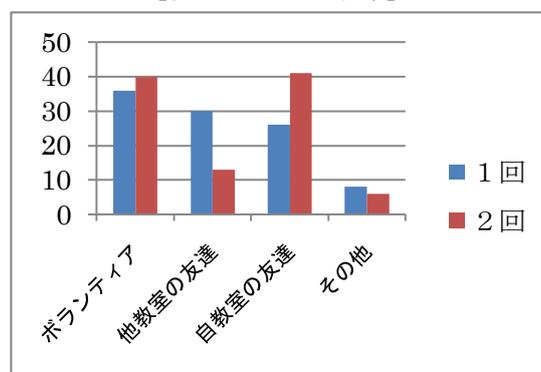
「他教室の児童生徒やボランティア等と交流を深めさせたい」ということを連絡協議会で確認しねらいとした。

児童生徒の参加アンケート結果をみると、支援ボランティア（1回：36%・2回：40%）、他教室の友達（1回：30%・2回：11%）、自教室の友達（1回：26%・2回：41%）であった。

スマイルキャンプは、児童生徒の人間関係を広げるきっかけづくりの場としての役割を果たしているといえる。

平成22年度は、人間関係づくりに効果があるといわれているカプラを活動プログラムに導入した。カプラの作品例「ナイアガラの滝」では、全員で作る楽しみやドキドキ感を味わったり、カウントダウンを全員で行い一体感を演出し、積み上げたカプラが崩れる様子を楽しんだりすることができた。児童生徒と指導者が一体となり、夢中になって活動に取り組む様子も見られ、親近感をより強めることができた。また、第2回スマイルキャンプでは、雪合戦を通して人間関係づくりに取り組む予定であったが、豊富な新雪というまたとない自然条件を活かす活動を当施設側から提案し

【参加アンケート結果】



(Q. だれと楽しく過ごせましたか?)



(新雪に自分の人型をつけてはしゃいでいる様子)

た。提案は受け入れられ、だれも足を踏み入れていない新雪の中で参加者全員が一体となってはしゃぐように遊んだ。



(カブラ「ナイアガラの滝」が崩れていく様子)

<課題>

○日程調整

SANBEスマイルキャンプ研修会は、講師や5つの適応指導教室等の都合を優先したために平日開催としたので、学生支援ボランティアの参加は、大学の講義の都合で実現しなかった。意識や関心の高い学生を参加につなげ連携を強めるためには、双方の都合を早期に調整して互いに参加しやすい環境を整えていく必要がある。

○事業参加者に対する改善評価

非日常生活となる事業の開催期間中は、自然の中での雄大な雰囲気や支援者の心配りもあって「人前では絶対にマスクをはずさなかった子どもが、マスクをはずして記念写真を撮ることができた。」などと、適応指導教室指導者の聞き取りの中で改善のきっかけとして朗報を受けている。しかし、事業を終え日常生活にもどった中では再登校できるようになったなどの劇的な改善につなげる状況に至る例は多くないのが現状である。

劇的な改善に至るとまではいかななくても、改善に向け努力している児童生徒の言動等の変化は見逃すことなく的確にかつ段階的に評価できる観点を探る必要がある。そして、この観点を各適応指導教室間で共通認識し、継続的な取組の中で客観的な評価を積み上げて、さらなる成果にしていく必要がある。

10 普及計画・普及実績

- ・事業の成果を報告書概要版にまとめて、中国四国地方の適応指導教室や全国の関係機関に発信する。
- ・当施設のHPに、事業報告書を掲載する。
- ・平成22年度思春期保健関係者研修会において、SANBEスマイルキャンプの取組が適応指導教室指導者より発表された。

11 その他

平成22年度は、新たな参加機関の増加により5つの適応指導教室等でスマイルキャンプを実施した。また、島根大学教育学部以外の支援ボランティアとつながりができたことなど、SANBEスマイルキャンプの取組が認知され広がりを見せていることを実感できた。そして、「スマイルキャンプでの活動が自信につながり、再登校できるようになった児童がいる。」と状況改善について話を聞くことができたことは、大変うれしいことである。

(担当 重田幸輝)

<参考・引用文献>

- ・「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」(平成15年3月：文部科学省)
- ・平成21年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(平成22年8月5日付文部科学省)
- ・事業等報告書(H15～H21：国立三瓶青少年交流の家)